

グロリオサ

齊藤

梢 宮城

如月のサインポールが横たはり理容「志のぶ」は解体となる
街へゆくバスの窓から見る解体もうすぐ春になるはずなのに
理容「志のぶ」空青き日に無くなりて私の町がとてもさびしい
グロリオサ緋のグロリオサ剥きだしのわが感情のこのグロリオサ
知らぬ子は知らないままでいい津波 恐怖を語る（見学）多し

インナーピース

寺田阿兄 群馬

卒寿なほへ内なる平穩（インナーピース）定まらず小心愚直おたおたと生く
愛もろもろ容るる器の小さくて人のこのころの薄氷（うすひら）になく
目守りある枯山水の白砂をはつか濡らして春の雨すぐ
パステルの蒼重ねゆくあかときのしじまの色を描かんとして
デパートが届きしやうな品揃へ商品カタログ見応へがある

鳥追ひ唄

中津川 勒 坐 埼玉

増えざれど欠くることなく年の夜に家族四人で食ふ蕎麦うまし
元朝に猪の牙のごとき月泛けり平成末の乱潜む年
微熱ありてとろうりねむる小正月鳥追ひ唄が聞こえたやうな
郷にのこる鳥追ひ唄で追はれしは田畑を荒らすさぎ、すずめ、とき
村中をほんやらほういと鳥追ひきわらぐつ履きてわらほうし着て

ひかりの声

大西淳子*千葉

雨あがり空を見あげて人びとは水惑星の駅を出でゆく
夕闇が追い越してゆきわたくしの右ポケットのどんぐりが消ゆ
とがりなきひかりひろがるきさらぎの海のベッドで旨寝がしたし
スプーンのヒップラインのふくよかさひそかに春を待ってもよいか
落葉を終えたる公孫樹その空に声域を越すひかりの声す

何とかしてよ

河北笑子 神奈川

齢重ね明日をたのめぬ足もとに掃溜菊の冬の濃緑
乗り遅れしバスの後尾を見送りに夕日の中にかざすてのひら
電動の鉛筆削りを使ひ馴れ戸棚に仮死のまま肥後守
冬の夜の冷ゆる肌へに触れしとき真珠が誘ふ六十年前へ
諸葛孔明何とかしてよ米中、日韓、鶯いすかの嘴はしの食ひ違ひ

寒梅忌

佐藤典子 東京

風のあと夜空の澄みて五つ六つ小さき星増ゆ寒く仰げば
午前五時熱き珈琲吹きさまし独り占めする真つ新の(時)
(海坂藩)に幻の雪降りをらむ寒梅忌今日江戸は木枯らし
(1月26日、藤沢周平忌日)
花屋さんのおまけ二本の水仙が香る机上に『雪明かり』読む
過ちて消してしまひぬ留守電にあたため置きし亡き友のこゑ

峡の夕暮れ

山田宗夫 長野

空つぽのプールの底の空色が空と呼びあふ校舎の陰で
ビギナーズクラシックス徒然草ひぐらし練れど暮れぬ春の日
歩行器に紅き交通安全のお守り提げて母の初戸出
厭はれて構やしねえよ嘴太が眼球のごときものを啜へて
椋鳥を逐ふ威銃おどしづつ鳴りわたり峡の夕暮れ冷えまさりたり

六十年代ジャズ

小田部 雅子 静岡

へサキソフォン・コロッサスのアルバムの青はこの空、寒天に鳶
かさねこしいくつもの会あひいくにんの人を思へば春の夜の雨
酒やめて三日くらせば夜は長し書いて詠うたつて読んで、まだ今日
なにがなし整髪料のほひせり六十年代ジャズを聴くとき
ランダムに浮かび消え去る断片の記憶の春の川面のきらら

鳩は疲れる

吉本由美 大阪

起き抜けの顔はおかめで散らばりし目鼻たしかめざぶんざぶ洗ふ
灯を消して闇にしづみし部屋ぬちに雨音ひびき明日を感じず
ガスコンロみがけばふいにうづきたりお焦げのやうな若き日の恋
手にうけて量感のなく雪とけぬ友はコスモスやめると告げたり
アイドルが活動休止と騒がしきニュースに暮れて鳩は疲れる

大天守閣

飯田

進*兵庫

しんしんと五百羅漢は雪に濡れ夜のふかさに限りは無くして
花曇り神戸元町高架下金ボタン売るトシ釦店
見下ろしの断崖絶壁紺碧の海に飛び込むオオカツオドリ
見下ろしたところにおいて仰ぎ見る青空にある大天守閣
さくさくと仕事が進む草刈り機、ひだりまわりで台風はくる

金剛山のあたらしさ

米田郁夫 奈良

ひしひしと更けゆく夜の星二つ氷となれり稜線のうへ
星の降る夜の窓近く山茶花のなんといふこの紅のくらさよ
鹿も猪も^し時^しに帰る霜の夜は丸まりて寝むけもののやうに
ゐのししの掘り起こしたる木の根方乱れて深しひづめの跡は
雪まとふ金剛山のあたらしさわれの生まれし衣更着に入る

ビタミンカラー

鈴木千登世 山口

センターまで10日と書けるチョーク文字わがクラスだけ教室になし
自信二分不安八分の顔上げてわれを見つむる八十四の瞳^め
印刷し折つて数へて整へて配つて撒し礼をして

「やらかした」と笑ひて寄りて来る生徒根拠なけれど「大丈夫」と言ふ
生徒らの三倍生きし身にまとふビタミンカラーの絹のスカート